

エッセイ「少年の心をとらえた讃美歌」

昨夜は、讃美歌 517 番についての解説とメッセージをして頂き誠に有難うございました。

何気ない気持ちで選んだ讃美歌でしたが、とても多くの意味が含まれている歌だという事を改めて学ばせて頂きました。

また、Mさんの素晴らしい賛美の声と穏やかな画面のバックグラウンドにも励まされました。Mさんが昨夜の動画を早速送って下さいましたので、先程もう一度聴いてみました。先生の一言一言が心にしみました。

余談ですが、私の手持ちの讃美歌解説書にとっても興味深い記事が載っておりますのでお知らせしたいと思います。

以下、「頌むべきかな」讃美歌物語 2 梅染信夫著 からの引用です。(注: 1993 年 11 月出版)

この讃美歌に特別の思い出がある善養寺康之という写真家の話をします。

昭和 20 年 8 月、日本は敗戦となりました。それまで群馬県の田舎町に疎開していた康之少年は、東京が廃墟と化したため帰れず、その町の小さなお寺で「疎開状態」の生活を余儀なくされていた。すると、同じ寺に中学校の先生がいて、英語の補習をしてくれることになり友人の誘いで康之君も参加することになったのです。

＜本堂に続いた 8 畳の部屋が教室で、それこそ昔の寺子屋そのままの平机を前にして正座すると、すき間風に揺れる裸電球の下で、先生が大きな声で英語の教科書を読み上げるのです。この先生の名前は今も思い出せません……。

教科書の補習が終わると、いつも決まったように英語の歌を歌うのです。青年らしい張りのあるテノールで先生が歌うと、私達はその後に続いて合唱するのです。主にフォスターの曲が多かったことを覚えています。そして、最後はこれも不思議と英語で讃美歌を歌うのです。

当時、群馬の榛名山の中腹の村に疎開していた私は、聖書も知らず、ましてや讃美歌の何であるかさえ関心がなく、ただ英語に慣れるという以外に全く興味もなかったのです。先生が特に熱を入れて歌った讃美歌は確か 379 番の「見よや十字架の旗たかし」と、517 番の「『われに來よ』と主はいま」の 2 曲と記憶しております……。

["Jesus is tenderly calling you home,

Calling today, calling today……"]

517 番の静かな美しい調べは、戦後の混沌とした世相の中で、わたしたちの心にしっとりとした安らぎを与えてくれたのです。

こうして勉強が終わると真っ暗な桑畑の中を薄暗い自転車のライトだけを頼りに、わたしたちはそれぞれの道を帰路についたのです。そして、別れ際にはいつも大声で讃美歌を歌いながら家路へと急いだことを思い出します。＞

善養寺康之さんはその後一流の写真家となり、今日も個展を開くなど活躍しておられます。その作品はほとんどが聖地をテーマにしたもので、イスラエルへの取材旅行は 20 回を越えるそうです。

――――以上

群馬県出身の私には、とても身近なお話で、あの榛名山への道のどの辺に疎開していたのだろうかなどと思いを巡らせた事でした。意味も解らず子供のころ覚えた英語の讃美歌が一人の人の進路を決めたのではないかと思った次第です。防空頭巾をかぶり防空壕に入った幼い時の生活を思い出したりしております。

立春を迎えたとはいえまだまだ寒い日が多い事と思います、くれぐれもお体ご自愛のうえお過ごし下さい。

感謝とともに

H. N